

博士論文（要約）

論文題目 大字を基礎とする集落の保全手法に関する研究

-五箇山における相倉・菅沼集落と周辺集落群が持つ特性に着目して-

氏名 森 朋子

本論文は、「ある種の村落共同体的性格をもつ、おおむね江戸時代の村」と定義した大字を基礎に、「生活空間の学校」といわれる山村集落空間について、五箇山を事例に、相倉・菅沼集落と周辺集落群が持つ特性に着目し、その空間理解の仕方を示し、その保全手法のあり方を考察するものである。

なお、本論文は、二部構成となっており、第一部では、これまでの集落の調査や研究と、集落の保全制度の歴史的変遷と現行を概観し、集落保全に対する課題を捉え、第二部では、富山県五箇山地域において、保存集落である相倉・菅沼集落とその周辺集落群を事例に、大字を基礎にして空間構造分析を行ない、集落が持つ具体的な特性の抽出を通して近代以前に培われた空間に対する「意図」を読み解き、今後の集落の保全手法に対する考察をおこなっている。各章の要旨は、以下の通りである。

序章では、研究の背景と目的を整理した上で、集落の保全を巡る先行研究、「文化遺産本体と一体的な価値を形成しているもの」と定義した文化的景観の保全を巡る先行研究、集落に関する先行研究と、大字を基礎単位とした地域空間分析に関する先行研究を整理した。近代以降、社会が変化していく中で、現実の生活から切り離された過去の歴史的な文化遺産である保存集落に対し、現在そこに生活する人々の暮らしの中において、それをどう見直すか、あるいは生活のなかにどう組み込むか、という論点において、建造物群や景観という目で見えるものに偏重した現在の保全制度に対し、集落が持つ特性を踏まえた保全手法の再考察の必要性を提起した。また、大字単位を基礎として、近代以前の地域の空間構造を分析する本研究の独自性を示した。

第一部にあたる第1章から第2章では、我が国の庶民生活への着目が柳田國男によって始まったとされる中、集落空間がどのように捉えられ、保全されてきたのか、その研究と保全制度の歴史的変遷を整理した。

第1章では、第一部の前段として、集落空間に対する研究の展開について、著作や既往研究などのレビューを中心に整理し、現在の集落研究の傾向と、保存のための集落調査の現状と課題を明らかにした。

そこでは、1) 柳田國男をはじめとする民俗学における集落空間に対する研究視点の変遷と「村落空間論」研究、2) 民俗学から民家研究に端を発し建築計画学における生活構造研究や農村計画学へ展開した建築学における集落研究、3) 保全制度の整備とともに展開した保存のための集落調査、という3つの分類からの整理を試みた。1) 2) からは、集落空間の解明に対し、実体論的研究から象徴論的研究に推移している傾向にあることがわかったが、同時に、それらの知見が保存のための集落調査に十分活かされていないことがわかった。

第2章では、我が国の保全制度において、集落がどのように捉えられてきたのか、集落に関する保全概念の歴史の変遷を踏まえ、現行の集落の保全制度における課題の根源を明らかにした。

ここでは、まず五箇山における文化財保護の歴史を整理することから、当時の社会的背景と保全概念を概観した上で、我が国の集落に関する保全制度の歴史について、1975年の文化財保護法改正による伝統的建造物群保存制度（以下、伝建制度）成立を一つの到達点と仮定し、その黎明期（民家保存）、萌芽期（史跡指定）、形成期（伝建制度検討期）、運用・醸成期（歴史的環境・文化的景観制度）の4つの時期に分類し、整理を試みた。特に、萌芽期と形成期における議論の内容について、当時の資料を掘り起こして考察し、現行の保全制度における課題の根源を明らかにした。

第二部にあたる第3章から第7章では、我が国の代表的な保存集落である相倉・菅沼集落をもつ富山県南砺市五箇山地域を舞台に、「生活空間の学校」といわれる集落が持つ特性に着目し、秩序性、単位性、可変・不変性の3つの視点から実証的に分析し、そこで明らかにした特性を踏まえ、空間にある「意図」を読み解くことから、村（大字）空間とは何かを示し、今後の集落の保全手法について検討をおこなった。

第3章では、相倉・菅沼集落における近代以前の集落空間構造の読み解きから、集落の持つ秩序性を具体的に抽出した。

まず、五箇山における各集落は、大字と一致していることが確認できた。よって、「ある種の村落共同体的性格をもつ、おおむね江戸時代の村」とされる大字と、現在の行政区画の最小単位である集落が一致しており、その集落空間は、柳田國男の領域区分である「ムラ・ノラ・ヤマ」の三つの領域から構成されている。

集落の持つ秩序性について、明治初期に作成された『地引絵図』の読み解きを中心に行なった。相倉集落では水環境による分析から、全戸が汲み水をしたと言われる菅沼集落では日照環境による分析から、ムラ空間における秩序性を明らかにすることができた。ノラ・ヤマ空間は、この秩序を基礎に展開されており、ムラ空間にある秩序の解明が、集落構造解明の基本となっていることがわかった。

集落の持つ秩序性は、各住居の立地環境上に、利便性など居住条件の差として露呈している。この序列が基となり、集落空間に中心性やカミ・シモといった方向性、分家化による集落の発展方向などが示され、この不文律の秩序が、ムラ空間を規定する一つの要因であることがわかった。

第4章では、第3章で確認した集落と大字の一致に基づき、五箇山を集落の集合体、すなわち44集落で構成された集落群として捉え、地域における集落の機能に着目し、自

自然環境と社会的側面から五箇山の地域空間を分析した。これにより、集落が持つ単位性に対する特性の抽出を試みた。

五箇山を44集落により構成された地域とみると、大部分の集落は庄川流域圏に位置しており、砂礫段丘と山地・丘陵地に二分してムラが立地し、その領域である大字は、地形に基づく自然環境に呼応して分割されていることが読み取れる。また、五箇山の谷ごとで集落規模に差が見られ、それらは江戸時代の村高に反映されていることがわかった。特に、ノラ面積と村高が、相関関係にあることが確認できた。よって、生産能力の高い自然環境が、集落立地やその規模を決める規定要因の一つとなっていることがわかった。

また、五箇山における集落単位の規定要因は、水利の管理単位に依拠することがわかった。よって五箇山の集落は、水利に基づき、大字（ムラ・ノラ・ヤマ）を基礎に、ムラ空間から組空間へ、空間単位がさらに分解できる。これらの空間単位をベースとして、空間の類型化を行なった。

第5章では、近代化により次第に変化していく五箇山の変容をみることから、第3章でみた近代以前の姿と現時点を比較し、変化したもの、変化しなかったものの考察から、集落の持つ可変・不変性を抽出した。

特に、戦後一気に進んだ水田開拓により、合掌造り家屋の成立要因の一つである養蚕業が衰退したことは、すなわち、これまでの桑畑を水田に変え、交通路の整備が進んだことも相まって、茅屋根を瓦など他の建材に置き換え2階を増築するなど、ムラやノラ景観を大きく変えていった。同時に、出稼ぎの慣習や職業の多様化なども重なり、集落の共同体としての紐帯も変化していく。一方で、相倉・菅沼集落における、明治20年頃から現在に至る戸数の変遷を地図上に図面化して考察すると、昭和初期頃をピークに減少傾向はいまだ続いているものの、その居住立地の変遷には法則がみられ、第3章にみた集落が持つ秩序性は変わっていないことがわかった。

第6章では、第3章から第5章を通し、明らかになった集落が持つ特性を横断的に考察し、第4章で抽出した空間類型に見える共同体の「意図」を明らかにした。これにより、村（大字）空間とは、共同体が自然環境を読み解き、段階的に立地・形成・計画した空間であることがわかった。

第7章では、封建制度から資本主義へ社会が大きく移行し、集落のおかれる状況が変化したことを踏まえ、哲学者内山節の「共同体の基礎理論」を用い、集落の現代的再解釈を行ない、現代における集落の再評価、すなわち価値付けを行なった。「自然と共同体の空間」であった集落が、社会変化によって、「自然と個人の空間」へと変化の過程にあること、これを踏まえ、「自然と共同体の空間」が現代の集落に残された近代以前

の生活様式の「遺構」であるとし、これこそが集落の持つ、現代的な価値であることを明らかにした。

次に、集落の価値を基に、集落の保全手法を考察した。大字を基礎に、集落の保全概念を提示し、集落の持つ特性を活用した「保全的刷新」、すなわち歴史的な原理を継承しながら展開する動的な保全手法を提示した。但し、本研究は空間の保全手法を提示するに留まり、住民の生活にどう組み込むかについては、今後の課題とした。

さらに、大字を基礎に地域をその集合体と捉えることから、保存集落から周辺地域への一体的な地域保全と文化的景観制度に対する新たな知見、さらに本理論の発展として、地域計画への展望を示した。

結章では、各章で得られた知見の整理を行ない、本研究の成果と今後の課題を整理した。文化財としての集落を持つ地域にとって、保存集落とは、その地域の近代以前における生活様式を示す、地域アイデンティティそのものである。その保存集落を持つ地域は、概して過疎化や高齢化の問題を抱えながらも、地域アイデンティティを軸に将来に向けた地域づくりを目指している。そうした中で、五箇山でみてきた集落の持つ特性は、地域に当然のこととして存在しており、それゆえに地域住民はそれを価値として捉えていない。本研究は、大字を基礎に、地域住民にとってはごく当たり前のアプローチを提示しており、ここに保存集落から周辺地域へ、今後の一体的な地域保全や地域計画論への展開の可能性をみることができる。